

聖書：ローマ 8：14～16

説教題：御霊によって「アバ、父」

日時：2015年11月8日

先週は13節までを見ましたので、今日は14節からになります。原文を見ると14節の頭には「というのは～だからです」という言葉があります。つまり今日の箇所は13節までとの関わりで理解して行かなくてはならないことになります。14節に「神の御霊に導かれる人は」とありますが、もし前とのつながりを考えないで読むと、どんな人のことを思い浮かべるでしょうか。「御霊の導き」というと、人生の様々な場面における不思議な導きのことを考えるかもしれません。ある人は自分の進路について思い巡らしながら道を歩いていた時、ふと次のような考えが与えられたと私に話したことがあります。もし次に渡る横断歩道が青なら、今、私が考えている進路の道に進めという合図にしてください。しかしもし御心でないなら信号を赤にしてその道は進むな！という合図にしてください、と主に祈った。そしてその人が歩いていると、最初の横断歩道で信号が青になった。私はこの導きを受けた、とその人は言いました。そういうことを「神の御霊に導かれた人」という部分は語っているのでしょうか。先に述べた通り、14節は原文では「というのは、神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもだからです。」と記されています。つまりここで言われている「神の御霊に導かれる人」とは、その前の1～13節の内容を受けたもの、それをまとめた言葉なのです。

1～13節では、信者は今や肉の中ではなく、御霊の中にあると言われました。それまでの罪と死の原理に代わって、今や御霊が私を支配する原理となった。その御霊が私たちの内に住んでいてくださるので、この死ぬべきからだもやがて生かされる。だからあなたがたはこの御霊の働きに応答して、からだの行ないを殺す歩みに進むように！と言われました。これらのことを指して、パウロは14節で「神の御霊に導かれる人は」と言ったのです。ですからこの文脈を無視して、何か不思議で素敵な導きのことを考えてはならないのです。ここで言う「神の御霊に導かれる人」とは、からだの行ないを地道に一つ一つ殺して、聖化の戦いに励む人、そしてそこに与えられるいのちの祝福に生きる人のことなのです。

パウロはこのように「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもだからです」と言います。パウロはこうして 13 節までの内容を「神の子ども」というテーマと結びつけています。言い換えれば聖化の歩みが、私たちが神の子どもであるという観点から考えられているということです。なぜ私たちはからだの行ないを殺し、聖い歩みへ進む必要があるのか。それは私たちが神の子どもとされているからです。私たちは聖化をそのように捉えたいと思います。からだの行ないを殺すという取り組みは、ただ苦しいだけのつらい作業ではないのです。それは私たちが神の子どもにふさわしく造り変えられて行くための道のりなのです。親子には似ているところがたくさんあります。子どもが小さい頃、幼稚園の卒業式で子どもとそのお父さんやお母さんを見ると、本当に良く似ていて、なるほど！と納得することが良くありました。あるいはある家に電話をかけて最初に出た人がお父さんの方なのか、子どもの方なのか、その声からは判断できなくて、「あの～どちら様でしょうか」などと尋ねてしまったこともしばしばです。人間には欠点がたくさんあるため、親には似たくないという子どももたくさんいるでしょうけれど、神はそうではありません。私たちは神の子どもとして神に似るようにと導かれています。聖霊はそのことに向けて、私たちがからだの行ないを殺し、真のいのちに生きるようにと導かれるのです。御霊がこのお考えのもとで私たちを導いてくださっていることを覚えて、私たちも目標を見据えて御霊の導きに喜んで従いたいと思います。

さて今見た 14 節には、「私たちが神の子どもであること」と「御霊の働き」との間には深い関係のあることが示されましたが、御霊は具体的にどう関わられるのかが 15～16 節に記されています。まず 15 節。ここに「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく」とあります。かつての私たちは神の前に立つ自分を思う時、その心に満ちる思いは一言で言って恐怖でした。すべてをご存知でお見通しの神の前では、多くの罪を犯した私にはさばきしかない。即座に御怒りが下されてもおかしくない。そんな神を思ったらビクビクするばかりで、とても近づいて行くことなど無理です。しかし私たちは「子としてくださる御霊を受けた」とあります。この御霊によって「アバ、父」と呼ぶ、とあります。この「アバ、父」という言葉は、ご存知のように、イエス様が使った言葉です。アバという言葉はアラム語の「お父ちゃん」とか「パパ」に相当する言葉で、幼児が家庭で使う親しさと信頼とが込められた呼びかけです。これを神に対して使える人は、それまでの歴史には一人もいませんでした。しかしイエ

ス様はこの言葉をもって神に呼びかけられました。それはイエス様が永遠の昔から神の独特な一人子であられることと関係します。イエス様は自分の父に、アバ！と呼びかける交わりに生きていました。その言葉を何と御霊は私たちも神に対して使うようにと導くのです。どうしてそんなことが可能でしょうか。それは御霊が私たちをイエス様と結び合わせることによってでしょう。

私たちは聖霊によってイエス様を信じて、罪を赦され、さばきを恐れなくて良い者とされました。また義と認められた者として、神に受け入れられることを信じて、近づくことができる者とされました。しかし救いはそれだけではありません。さらに私たちは神の子どもという身分を与えられます。15節の「子としてくださる」という言葉の意味は「養子にする」というものです。何と私たちはキリストを信じて罪を赦されるだけではなく、神の家族に養子として迎えられます。しっかり押さえるべき前提は、神の家族における子どもは本来イエス様だけということです。他に神の子に相当する人はいません。私たちはその特別な神の子イエス様と結ばれることによって、イエス様が神の前に持っている神の子どもという地位にまで引き上げられるのです！そして覚えるべきは、当時のローマ社会における養子は正式な子どもと全く同じ扱いを受けたことです。ですから私たちはイエス様が神の前で持っているのと同じ特権にあずかせていただくのです。

ヨハネの福音書 17 章 23 節を見ると、イエス様は大祭司の祈りにおいて、ご自分と結ばれる人々を指して「あなたがわたしを愛されたように、彼らをも愛されたことを」と語っている言葉が出て来ます。何と神が御子イエス様を永遠の愛で愛しているその愛で、私たちをも愛してくださるといことが言われています！その愛にあずかって、私たちも御霊に導かれて、ついに「アバ、父よ」と神をお呼びして近づく者とされるのです。

ちなみに福音書においてイエス様の「アバ、父よ」という言葉が記されている箇所はどこでしょうか。それはマルコの福音書 14 章 36 節で、あのゲッセマネの祈りの場面です。イエス様はあの大変な状況でも、「アバ、父よ！」と御名を呼んで、神に信頼する祈りをささげられた。ですから私たちも苦難に囲まれ、もう終わりかと思えるような状況でも、「アバ、父よ！」と父に向かって呼んで良いのです。聖霊はそのような苦しい

中でも神に向かって「アバ、父よ！」と呼ぶように導いてくださるのです。またこの「呼ぶ」という言葉は「叫ぶ」という意味の言葉です。すなわちただボソッと名前を呼ぶのではなく、内側から湧き出る自然な発露として、確信を持って、「アバ、父よ」「天のお父様」と叫ぶのです。これはまさに御霊の導きによることなのです。

16節にはさらに素晴らしい真理が語られています。そこに「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。」とあります。15節では御霊に導かれて神の御名を呼ぶということが言われました。すなわち私たちが神に向かって声を上げるまでの御霊の導きのことが言われました。それに対して16節は私たちが実際に神の御名を呼ぶ時のことです。その時に御霊が私たちの霊とともにあかししてくださいる。細かな解釈を巡っては議論がありますが、言われていることはこういうことでしょう。私たちは御霊に導かれて確信を持って「アバ、父よ！」と呼びます。その時、私たちは「私は神の子どもとされているのだ」との意識を持って、そのことをします。ところがその時、そこに御霊が加わってくださって「そうだよ、あなたは確かに神の子どもとされていますよ」という強力なあかしを加えてくださる。何かを語る際、一人でそれを言うだけではなく、そこに助け手が加わって一緒に声をあげてくれたら力強いものです。御霊はそのことをしてくださいるのです。そばにいて、そうですよ！そうですよ！あなたは本当に神の子どもとされていますよ。祝福の中に入れられていますよ！とあかししてくださいる。そしてこの言葉は現在形で書かれていて、継続的にそうするというニュアンスを持っています。ですからこれは人生に一度あるか、二度あるかというような出来事ではないのです、御霊は通常のこととして、継続的な働きとして、このように私たちを励まし、確信を持って神に近づくように導き支えてくださるのです。

私たちはこの祝福に生かされたいでしょうか。クリスチャンは、このことを経験を通していくらか知っているはずでしょう。この聖霊の励ましがあるから、私たちの信仰は今日も支えられています。しかしこの箇所を読む誰もがもっと深くこの御霊の祝福にあずかりたいと願うのではないのでしょうか。どうすれば良いのでしょうか。考えなければならないことは、私たちはただ御霊が下さる確信の祝福だけを求めることはできないということです。この御霊の祝福にあずかりたいなら、その他のことも導く御霊の働き全体にあずかることを求めなければならない。御霊の働きを切り分けて、ただ聖霊のあかし

だけを私にください、というわけにはいかないのです。14節で見た「神の御霊に導かれる人は」という言葉に含まれる御霊の働き全体にあずかることが大切なのです。

ローマ書8章のここまでの言葉を通して、御霊が私たちの内に住んでいてくださるといふ真理を改めて受け止めたいと思います。今や罪と死の原理からいのちの御霊の原理へ移されたことを感謝したいと思います。その御霊が私の内に住んでいてくださるので、この死ぬべきからだもやがて生かされる。そしてこの御霊に導かれる人は神の子どもですから、御霊は必ず私たちを聖化の歩みへと導きます。私たちはその御霊の導きに信頼して、からだの行ないを一つ一つ殺す生き方へと進みたい。このようにして御霊に信頼し、御霊に従う歩みとセットで、御霊は私たちが神の子どもとされていることを確信させてくださり、「アバ、父よ！」とあらゆる時に神に叫ぶ心を与えてくださるのです。そして私たちがそのように父なる神を呼び、近づく時に、「そうですよ、あなたは神の子どもですよ、神の祝福の中にいるのですよ」と一緒にあかししてくださり、私たちをこの上ない力で励まし、支え、地上の歩みを強め導いてくださるのです。